
C OSS WORLD PUZZLE

シルクロード

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

C O S S W O R L D P U Z Z L E

【Nコード】

N 5 6 5 1 W

【作者名】

シルクロード

【あらすじ】

MMORPGの好きな少年、タツヤは異世界から来た少女と出会う。それと同じ頃世界は段々と混沌の色を見せ始めた。タツヤが昨日まで遊んでいたゲームのモンスターが現実に見れたのだ。タツヤの幼なじみチユはゲームの中で不可解な現象に遭遇する。世界を越えた壮大なファンタジーが今、幕を開ける。

異常な日常へ（前書き）

この作品はフィクションです。

実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であつても何の関係もありません。

異常な日常へ

「キンコンカンコーン」

午後のけだるい学校の空気にチャイムの音がなった。ホームルームの終わりの鐘だ。

「ふあ〜。」

テストで寝てしまった。そして、テストが終わってしまった。二つの意味で……。追試という悲しい現実が待っている……。そんなことを考えていた。でも、憂鬱になるし考えるのを今日ぐらいは休んでもいいかも知れない。一応未来ある有望な若者のつもりだからな。

「おつかれー。テストどうだった？」

そう言っただけで誰かがオレの顔をのぞき込む。黒髪のショートヘアの女の子だ。

「なんだ〜。チユか」

「本当にお疲れみたいね……」

そりゃ、そうだろう。昨夜はオンラインゲームを徹夜でやってたんだから……。

「もしかしてタツヤ、ゲーム付き合わせたの怒ってる？」

「もう怒る気力もないよ。優等生と同じサイクルで遊んでたら死ぬわ」

頬杖をついて、ため息をつく……。

「この様子じゃ、今日のデートはとりやめかしら」

そういって、悲しそうな顔をするチユ。そんな顔……ずるいぞ……。なんかオレが悪いみたいないな気分になってくるじゃないか！！

「わかった。わかったから、お願いだからそんな顔するな」

チユの顔がパアツと華やぐ。それは、まるで天使が舞い降りたようだ。本当にずるいよチユ。現実世界ではナイトとか、柄じゃないけれど何でもしてあげたくなるじゃないか。結局夜の9時に待ち合

わせることにした。

……結局また徹夜かよ。オレ。そんなちっぽけなことで一喜一憂できる日常が

チユが部活にゆくというので、オレはすぐに学校を出た。夕暮れの商店街ってヤツだ。何時もは、この時間になると帰りを急ぐ高校生と買い物をする主婦とが入り交じり大混雑をしている。それが今日は、どういう訳か人が誰もいない。これは快適にスイスイと歩ける。何時もより十分は早く帰れるので嬉しい反面どこか寂しい気がする。

そのとき、目を疑うような出来事が目の前で起こった。物陰から、愛嬌のある生き物が飛び出して来た。シッポが手の形になったウサギだ。その姿はまるでオンラインゲームに出てくるフィードルという雑魚モンスターのようだ。初心者向ダンジョンに登場するヤツだ。??おいおい、マジかよ……。

どう見ても可笑しいと思う。オレが可笑しくなってしまったんだろうか?ゲームのやり過ぎか?

「ファイア!」

その声とともに、火の玉が飛んで来た。どちらかというと落ちて来たたというほうが適切な角度だ。アーケードの屋根をどうやら貫いたらしい。

天井の破片が頬に当たった。熱い。熱いってことは幻覚とか、ゲーム脳とか、禁断症状とか、そう言うのじゃない。なら何だというのだろうか?これも現実のニコマだと言うのだろうか?

そう思った瞬間何かに押しつぶされオレはバランスを崩した。なんかとつてもやわらかいものだ。

「つててて」

オレは何が起こったか把握するために目を開けた。なんと、其処

には一人の少女がいた。見た目からして、十四歳位。深紅の髪の少女だ。

「ちょっと、邪魔しないで!!」

少女はそう言ってオレの襟をつかむ。

「何しやる!」

「それはこっちの台詞よ! 結界魔法を無視して此処まで入って来て!？」

? 結界魔法?

その言葉の意味を訊こうとした次の瞬間、フィードルがこっちに向かつて来た。

「バカ、いいから早くどけ!」

「なによ! あんたがどけばいいじゃない」

どうやらオレに気をとられて気がついていないらしい。

「フィードルが来てるんだよ!!」

言われてやっと気がついた。少女は飛び上がってフィードルを避ける。しかし、上に乗っかられていたオレは回避行動が遅れた。やばい!!フィードルが突っ込んでくる。

「うわあ!!」

オレが頭突きを喰らいそうになって悲鳴を上げた瞬間、

「ウイニー!!」

少女が呪文を唱えた。小さな風が渦巻きフィードルに向かつていく。しかしフィードルはそれをよけようともしない。身に受けながらもチヨロチヨロと走り回っている。だが、オレはその風に体を巻き上げられ、空中に放り投げられた。

「もつと、安全な回避方法なかつたのかよ」

「うるさいわね!あんたが其処にいたのが悪いのよ!」

そう言って少女はフィードルに向き直る。

「おとなしく捕まりなさい!」

そういつて炎の魔法をうちながらまたフィードルを追い回す。

すると、あるうことがフィードルがこっちに向かつて突っ込んでくる。それを追う様に少女も追いかけてくる。どああ！来んなバカ！オレが何をした！！こういう場合は、取り敢えず逃げるだろ！！

「ファイア、ファイア、ファイア！！」

怒濤の炎魔法連発。しかも、炎はフィードルに当たってるのに全く効かない……。そのことに気がついてんのか！？まさか、ここまでゲームと一緒にとはな。

とりあえず

「やめろ！！軽く死ねる！！」

「あんたどうして一緒に逃げてるのよ！」

「お前のせいだろ！！」

全く無茶苦茶だ。

「取り敢えずそいつは魔法が訊かない」

んなもん知るか？オレだってこの訳の分からん状況に驚いてんだから。でも、もし物理攻撃で倒せるんなら……。オレは辺りを見回した。何か武器になるものはっど！！

「これは」

コンビニの傘立てが目に入った。ビニール傘を手に取るとフィードルに向かつて突き刺した。肉に突き刺さる感触がする。ズブズブと言った鈍い擬態音がつきそうな嫌な感覚だ。フィードルは暫くじたばたししていたが、力つきたのか動かなくなった。うわあ、オレはじめて哺乳類を殺しちゃったよ……。

いつの間にかフィードルは姿を消して宝箱に変わっていた。オレは宝箱をあけて中のポーションを取り出した。まるで、オンラインゲームの様に……。少女にポーションを渡す。

「はい、これ」

少女はその様子をいぶかしげに眺めてきた。

「これ、何処から出したのよ！？」

「ドロップアイテムだけど」

そう言つて、鞆にポーションをしまつ。あたかも当然の用に……。その自分の様子にオレは苦笑した。ゲームと現実の区別がつかなくなつてるじゃないか……。ふと辺りを見回すと通行人がちらほら歩いている

「人払いの結界を解いたわ。どこかで腰を落ち着けて、情報交換しましょ？」

それは賛成だ。このままいたら確実にアーケードを破壊した犯人扱いされてしまうし、今日の前でおこつた状況が一体なんなのか知りたい。オレと少女はひとまずその場を去つた。

巻き込まれて……（前書き）

この作品はフィクションです。

実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であつても何の関係もありません。

巻き込まれて……

閑静な住宅街。その一角のアパートがオレの家だ。戦闘の後、目を避ける様に帰ったこともあり、オレらは相当疲れていた。オレも少女も座卓に直行して腰掛けた。

「ふう」

思わずため息が出る。オレ、相当疲れてるな。ふと、手を伸ばすと、なんかポリエステルのごわごわした感覚が……。

「げ、パンツ!？」

さっとパンツごと手を座卓の中に引っ込める。それから、改めてオレの部屋の中を見渡してみた。洗濯物やらマンガやらが散在している。一般的な男子高校生の部屋と言えいいのか?多分。オレの友達の部屋も似たようなもんだからな。男友達の部屋にしか上がったことないけど、きっと女の子の部屋ってもっとキレイなんだろう。「わりい、相当散らかってるな」
立ち上がるうとしたが、立ち上がれない。

「すまない、お茶を出す気力もない」

多分、これは体力的なものより精神的なものだ。手にまだフィードルをさしたときの感覚が残っている。哺乳類を殺して平然としていられる人がどれだけいるだろうか。そう多くいるまい。オレがその感触を味わって吐かなかったことが奇跡だ。

「とりあえず、お礼は言っとく」

そう言っただけ少女は頬杖をつく。桜色のくりくりとした瞳だ。ちょうど、上目遣いみたいになってすごく可愛い。

「オレは君みたいに大それたことが出来る訳じゃない」

「謙遜するのは嫌み。私が知らない魔法生物の特性を知っていたんだもの」

そう言っただけ赤な髪をかきあげた。

「私はマリー・フランボワーズ。魔導士治安局の一員よ」

「ソリュ……何？」

「なんで、あんた知らないのよ？」

マリーのジト目。ナンダカコワイヨ。

「あんた、ソリュシエ魔導士じゃないの？」

「オレは“そりゆしえ”なんかじゃない。渡辺達也、わたりべたつや単なる高校生だよ」

「なんか可笑しいと思ったのよ。こんな田舎世界に魔導士がいるなんて」

落胆した様に少女は言った。勝手なこと言いやがって……。落胆されても困るんですがー！！

「ほんとはあんたの記憶、消さなきゃいけないんだけど、特別に許してあげる」

マリーはそれだけ言うつと立ち上がって窓の部分に何やら紙を貼った。紙には携帯電話のボタンみたいな絵が描かれている。マテマテ。ゼロハンテープで窓に紙貼付けたりするな！！はがした時ノリがのこって悲惨なことに成るんだぞ。大家さんに怒られる。オレは彼女を止めようと立ち上がった。

マリーの

「なんか文句あんの？」

の一言とともに火花が……。スイマセン。無いです。全くないです。全然ナイデス。

「分かればよろしい」

そう言つて紙の上を指でなぞつて窓を開ける。その先には異国情緒あふれる内装の部屋が続いていた。

「此処から先はわたしの部屋だから、パンツ魔人は入ってこないでパンツ魔人？ふと、自分の手に目をやるそこにはパンツが握られていた。げっ！最悪！！

このときを持って、マリーとの奇妙な近所付き合いが始まることになった。今日は何でこんな異常なことが多いんだろ？

今、アルディールオンラインの出発地点ルートタウンにいる。一般的にログインすると出てくる最初の街。名前はトウーリーズたしかそんな感じだったような。で、今私はタツヤを待っている。

「ほんとに疲れて寝ちゃったのかな？」

なんだか不安になって来た。だって何時もはこういう時間は守る人だから……。タツヤがいないんじゃないかな。

もうログアウトしちゃえ！

メニューを開く。

??あれ、おかしいな？ログアウトボタンが表示されてない。

今日遊んだデータが消えちゃうけど、しかたないよね？後で管理会社に文句いつてやる。パソコンの電源を切ろうとして手を伸ばすしかし、ゲーム用インターフェイスの前にある体は硬直した様に動かない。なんで、どうして!?

「すみません」

黒いシーフ、少年のボディだ。声はソプラノ。女性が変声前の男の子だと思う。

「あの、ログアウトの仕方が分からないんですけど？」

この言い方からすると初心者じゃないかしら？名前は咲也。そう、ステータスバーに出ている。

「えつとね。本当はメニューにある筈なんだけど、なんか消えちゃってるみたい」

辺りが騒がしい。ゲームの至る所で困惑の声上がる。今は夜の9時だもの。プレイヤーアクセスのピーク時間。一応、念のために訊いておこう。

「咲也は体動かせる？」

答えは、首を横に振る動作。やっぱり、だめなんだ。

「ビリッ」

スパークしたような音。視界にもなんかノイズみたいなのが走り

始める。そして次にみるみるうちに、街が赤く染まって……染まると言っても、夕日とかそうゆう赤さじゃなくて、なんか不気味な感じ。血みたいな感じかな？ 回りにいたプレイヤーの人たちも真っ赤だし私のボディも真っ赤だ。いつのまにか、ほのぼの系の街の音楽も消えていた。

?? 汝世界の外でその力を求めるか。

不気味なしゃがれ声。

?? 汝世界の外で力を求めるか (Y) or (N)

今度は血文字のようなフォントで浮かびあがった。一体なんなのよ。どういうこと？ 何かのイベントかなあ。だとしたらすごく凝ってるじゃない？ 確か、こういうイベントは (Y) と相場が決まってるってタツヤが言ってたっけ？

コマンドにゆりょーく (Y) !!

巻き込まれて……（後書き）

なんか、謎が謎を呼んでますね。

次回も多分新たな謎がうまれます。マリーは一体何者？魔導士治安

局とは？チユの前に現れた謎の文字は何？

次回をお楽しみに！

巻き込まれたものたち（前書き）

すみません。行進遅くなりました

巻き込まれたものたち

S i g h t 渡辺達也

ケータイの着信音でオレは目を覚ました。土曜日の朝っぱらからだれだ？ケータイの画面を開くとチユの二文字が……。ふと昨日のことを思い出した。昨日チユとゲームの約束したよな……。アレ？オレ昨日インしたっけ。オレは悪寒を感じながら電話に出た。

「もしもし？」

「あ、えと渡辺達也君？」

態と低めに出したチユの声。ああ、こりゃ、完全に怒ってるな。出ましたよ魔の君づけが……。正直いってチユは怒ったら怖い。喚き立てるとかそう言うのじゃなくてだな。

「チユ、あの……さ。オレが悪かった」

「だめ。許さない」

どんよりした雰囲気電話口から伝わってくる。怖いってのはホラーな意味でなんだよ、これが。

「許してくれ。堺山公園の売店のワッフルおごるから」

「だめ。そんなんじや許さない」

やっぱりそういうよな。

「じゃあ、やめるか。許してくれないんじやしょうがないもんな」

「はっ！」

きたきたきた！チユのスイーツアンテナ！！

「いくいく行く！！絶対だよ！」

「ああ。今から即効で着替えて公園向かうから」

「うん。絶対きてよ」

オレはケータイの通話を切ると、ケータイの時計を見た。

???なんだ、まだ朝の9時じゃないか。

売店が開くまで1時間ほどある。さて、どうしようか。布団から

下半身を起こし寝間着から着替える。

「ちょ……タツヤ!？」

その声が聞こえた。振り向くと窓の向こう側から今にも入ってこようというところで少女が硬直している。顔が熱い……。

「え、ま……。ちょっ。お前そんな所で何してんだ？」

羞恥心つてヤツなのか？ そうなのか？ いきなりのことでおれははこうとしていたズボンをはなしてしまった。その様子を見て……。

「ばか、ヘンタイ！」

マリーは窓をパンツと閉じて窓の向こう側へ帰って行った。窓をノックしてみたがマリーからの返事はなかった。

S i g h t ? 姫城知百合

?? やったやったあ。タツヤとデート！

私は低血圧なことなんか忘れてベッドから躍り出さず名はいられないよね？ この状況。だってタツヤとワツフル屋のチュロスでポツキーゲーム……で、何考えてんだろう？

自分の妄想に呆れながら、赤面しながら散々。

端から見たら変な女の子かも知れないけど気にしない!! だってタツヤとデートだし。一番のお気に入りに着替えてくっつと。私は小躍り気味に階段を駆け下りた。あまりにもドタバタうるさかったのかな？

「あら、朝っぱらから騒がしいわね」

ママがその様子を見てふふふと笑った。

「だって、タツヤにデートに誘われたんだよ！」

「あらタツヤ君？ まさか彼氏彼女の関係なんてね」

改めていわれると何か恥ずかしい。顔が熱くなってきたし、穴に入りたいって気分？

慣用句だと思ってたけれど、ほんとにそんな気分になるなんて……。私は食卓の席に座るとコーヒーを流し込むように飲んだ。

「あちっ」

「コーヒーが手にかかる。」

「今から動揺してたら、会うまでにお嫁に行けない体になっちゃうわよ」

そう言つてママが可笑しそうに笑つた。その後はなんか遠い眼になつて……。あまり話してくれないけど、お母さんきつと昔のこと思い出してんだらうな。

それはそうとして、時計を見る。あゝ。待ち合わせの時間に遅れちゃうー！！ 私は急いで堺山公園に向かつた。

S i g h t マリー・フランボワーズ

木の壁の暖かい部屋。フルール世界にあるわたしの部屋だ。箒が窓の前を上昇して飛んできた跡すぐに暖炉から新聞がそこで、わたしは今せ、せ、赤面してる。きき昨日から変なやつと思つてたけどまさかヘンタイなんて……。

ヘンタイが写つたりしないかしら。ぶっちゃけ、渡辺達也のば、ば、パンツ一丁の姿を見ただけで動揺なんてしないんだから。

「いい！断じて心を動かさないのよー！！」

おもわず声を荒げる。

「うるさいぞー！！」

あゝあ。隣の住人に起こられちゃったじゃない？これもそれも渡辺達也の所為よ。そうに違いないわ。だいたい、あいつがなんだつてゆうのよ。田舎世界カンパニーの魔法も使えない……いわば……そう、サルよ。サルと何ら変わりないわ。ケダモノよ。

私は頭を左右に振って邪念を打ち払つた。

S i g h t ? 渡辺達也

「ふあゝ」

大きなあくびを一つ。マジ眠いよなあ。今オレが何やってるかつ

て言うと、チユを待ってる。場所は堺山公園の本丸跡広場。その中心にある大きな花時計だ。今の時期はチューリップが植えられている。そしてこの辺りはとても賑やか。市唯一のランドマークだからそりゃあね。

ああ、それにしてもチユ遅いです。非常に遅い。アイツのことだからすぐに飛んで来ると思ったんだけど遅い。さてはネコに捕まってるな……。

チユのやつは無類の猫好きだ。オレが登校途中に声をかけなかったら万年遅刻魔と化しているかもしれない……。

「一見完璧そうな彼女の弱点を知っていると得した気分になるよな」
そうオレはつぶやいて……当たり前じゃんと思いきり苦笑。

だって幼なじみだもんね。

まだ、チユが来そうにないのでちよつと昨日のことを考えます。

フィードルがなぜ現実世界に現れたんだろう？それに魔法使いらしい少女マリィ。彼女は一体？訳が分からなすぎる。マジで訳が分からないよ。オレの頭が悪いとか多分そんなじゃなくてな……。

「難しそうな顔で何考えてんの？」

「うおー！」

そこにいたのはチユだ。チユがオレの顔を覗き込んで来る。正直びつくりした。

「ああ、すまんすまん」

オレはチユの到着に気がついていなかったらしい。するとそもそもぞとチユの両腕の間から何かが這い出てきた。クロネコだ。オッドアイで片目が赤、片目が青い色をしている。この色どっかで見覚えがあるような……まあ、気のせいかな。オレはクロネコの頭を軽く撫でた。

「さて、そろそろクレール屋開店だしいいこうか」

そう言った瞬間チユの表情が明らかに変わった。

「行く行く！」

スイーツスイッチだ。待ってましたとばかりに手を振り回し「れっ

「グー」の一言。

チユの抱いていたクロネコが地面に落っこちたのはゆうまでもないこと。

落ちたネコは急に殺気立った。それから段々と形が大きくなっていく。まるで毛を逆立てるようにどんどん大きくなっていく。そうか、さっき何か引つかかっていたのはこいつのことだったのだ。こいつはそうだ、こいつは変形猫型モンスターのケット・シーだ。

その敵意は完全にチユに向けられてる。オレはとっさにチユの前に立ちはだかった。

「いいから逃げる!!」

オレは力の限り叫んだ。その直後オレの体にケット・シーの爪が食い込んだ

意識が段々遠のいてゆく……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5651w/>

C OSS WORLD PUZZLE

2011年12月21日01時51分発行